報告タイトル

マレーシアにおける脱工業化過程をどう見るか

Is Malaysia Experiencing Premature De-industrialization?

氏名（所属）

苅込 俊二（帝京大学経済学部）

Karikomi Shunji（Faculty of Economics, Teikyo University）

要旨（800 字程度）

マレーシアのような中所得国で、所得が十分に高まらない段階で経済に占める製造業割合がピークアウトしてしまう事象は「時期尚早な脱工業化（Premature de-industrialization）」と言われ、中所得国の発展を遅滞させる課題と指摘されている（Rodrik (2016)など）。

マレーシアでは、製造業の GDP に占める割合が 2000 年の 31%から 2020 年には 23%に低下し、雇用に占める割合も同時期に23%から17%に低下した。マレーシアは、中国が「世界の工場」として存在感を高める中で家電やパソコンといった部門で競争力が低下し、製造業全体としてもバリューチェーンの上流への移行で遅れをとった。この時点でマレーシアの所得水準は 1 万ドルに達しておらず、時期尚早な脱工業化過程に入ったと言えるだろう。もっとも、主力の半導体は大手半導体企業による集積を通じて、主要輸出品として競争力を維持してきた。これに現在、米中対立の影響などを受けて同分野関連の直接投資が活発化する動きが加わっている。こうして、2010 年代後半以後、脱工業化の度合いは鈍化している。

しかしながら、マレーシアの製造業を主導しているのは外資系企業であり、半導体の生産過程でマレーシアが主に担う工程は付加価値のあまり高くない後工程（「組み立て」と「製品テスト」）である。このように、マレーシアでは製造業の高度化が依然として課題となっている。こうした観点からは、外資依存からの脱却を進める必要がある。例えば、半導体分野で並ぶ主力の資源セクターにおいて、資源加工による特殊化学品や油脂化学品など、より複雑な下流製品を生産していくことが求められよう。

また、経済成長の牽引役を政策的に製造業だけに限定すべきではなかろう。運輸、金融のみならず情報通信、コンピューティングといった近代的サービス部門は、製造業に対して補完的な役割を果たすだけでなく、技術と知識のスピルオーバーを通じて、高い生産性が期待できるだけでなく、新たな雇用を生み出す可能性を持っている。現在、産業オートメーション、高度なロボット工学、デジタル化が、製造業とサービス業の両方でプロセス変革を生じさせているが、こうした環境変化に適切に対応できるように、国内企業、人材、およびインフラの能力の強化が必要である。マレーシアが更なる発展を遂げていくためには、製造業と近代的サービスセクターの両輪でバランスの取れた開発戦略の構築が求められている。